百人一首抄 新

完

へ4
4722

百人一首抄

門 ハ
號 4722
卷

昭和十六年三月五日
石澤介吉氏寄贈

百人一首抄

天智天皇

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ　俗説に秋の田の稲を刈りとりて仮屋をつくりて居るなり　我袖は露にぬれつつ

うちかけ屋とつくりたる屋根の苫をあらみ　旨の日をぬれつつ

らみ　こは俗にいふ苫の編目のあらきなり　我　俗に自分がといふことなり　袖は露にぬれつつ　袖をもる人の方へ

さしてわが身はおろかのと　ゆるしなどしてと同じ意　夜を　神は露にぬれつつ　つゆにぬれつつ又

同じ意にて　夜の露に　とは　一首のさい秋の田のうちあなる

番小屋の屋根の苫はあらみ　そこに番をしてをる民の自らのそでは露にぬれつつ

ぬれつつ　かりほの　ぬれつつ　ぬれつつ　ぬれつつ

持統天皇　新古今　夏　題志らず

春すぎて夏来にけらし　らしハ治定にいふらし也 夏が来たらしとみゆるなり　白妙の

衣　たへとハ絹布の総名 きりの[illegible]す事を云　ほすてふ　今から来る[illegible]に[illegible]かすえてふハト云こと [illegible]衣ほそ

てふハ衣ほすとい[illegible]なり [illegible]の[illegible]る人たちの

天のかぐ山よ衣ほしたりといふ[illegible]　天のかぐ山　一首

のこころハ早や春も過て夏が来たらしい天のかぐ山に白妙の衣を

衣をほして夏目[illegible]を[illegible]る[illegible]かやう[illegible]

さて夏来らし白妙の衣ほしたり天のかぐ山とわりかく[illegible]

柿本人丸　拾遺　恋三　題しらず

流白衣ほしたるを[illegible]らんとしたるおもむき

あしびきの　山の枕詞也 [illegible]て枕詞といふ[illegible]の詞といひ かくるすべのま[illegible]て[illegible]らくいふぞ　山鳥の尾の

しだりをの　山鳥の尾ハながきゆへにしだり尾とて[illegible]

尾とい[illegible]のをいふ[illegible]二[illegible]

おて[illegible]の[illegible]の[illegible]とハ[illegible]の[illegible]の

つらねるものすて[illegible]の[illegible]　ながながし夜を　[illegible]

ひとりかもねん　[illegible]

一首のこころハ[illegible]ながながしき夜をひとりふしてねん[illegible]

[illegible]

山辺赤人（ヤマノベノ）　新古今　冬　題しらず

田子の浦に打出て　[illegible]

かすこれのふりつもる[illegible]　みれば　[illegible]　白妙の

[illegible]の[illegible]　ふじのたかねに

雪ハふりけり　一首の心ハ旅ねのやどり、
田子の浦へ立出てみれバふじの高ねに雪ふりけり
さるを是ハ万葉集にハ白妙にといふ也
せしき
おもてこれを思ひつゞけてゆかしみけるに雪ふりけり
けると也

猿丸太夫　古今秋上　是貞のみこの家の哥合のうた
奥山に紅葉ふみわけなく鹿の
声きく時ぞ秋ハ悲しき　一首の
心ハ峰をさかりてハ紅葉ふみわけなく鹿の声などを
きゝしみ奥山にて紅葉をふみて鳴鹿の

声きく時ぞまさりてかなしくおぼゆるとの言也
ぞの字ハ気をつむる也古今集にてハよみ人しらずの哥也

中納言家持　新古今冬
かさゝぎのわたせる橋におく霜の
白きをみれば夜ぞふけにける　橋ハ二ッ也宮中の御階に
西明寺(?)ハ…
いふよみ天の川をわたるとみるべし　一首の心
ハ天の川などすさまじき大空に霜の置きたる
これがりそや夜がふけゆきけるにや　詩にも霜満天と
作くる也霜ハ空にしきりて霜の置べく

かしき也雲のみちふきとぢて大宮の事を鵲の橋といひ
霜の置たるをしろきとよめるは霜のさむけしとたとへ
いへるが一首の趣向にて候此説契沖が説に従て
今すこし此みちの此説をやはらげしるしつけいふべし

安倍仲麿

古今羇旅 もろこしにて月をみてよめる 左注
此哥ハむかし仲まろをもろこしに物ならはしに
学問させ也 つかはしたりけるにあまたの年をへてえ
まうでこざりけるを 当年もえ帰朝せざりし也 此国より又使
まかりいたりけるにたぐひてまうでこむとて出たち
けるに明州といふ所の海べにて
彼国の人ども也 かの国の人馬のはなむけしけり 餞別也
夜になりて月のいとおもしろくさし出たりけるを見て
よめるとなむかたりつたふる

天の原 天の事也 ふりさけみれば 遠くはるかに見やりたるを 春日なる 春日の里也
三笠の山に 出し月かも
はるかに見やりたる也月のおもしろくさし出たる
事を此国にてながめたりしを思ひ出てよめるなるべし
三笠山ハ春日にある山也 かしこにて大空の中にわたれるを
むかし仲丸いまだもろこしへわたらざりし奈良の京にて
まりし比にながめし三笠の山の月も一つ也との
心ばへなるべし 一首の意ハ大空の
はるかなるあれハ海の中より出る月かげを見て此月ハ我
国で春日なる三笠山にかゝりしその月と同じ物か
とて大和にハ此所なるべき明州ハかぎりなき海辺にて

雨のさまなれど見まても面白き故百首に入てめづらしき歌也

喜撰法師　古今 雑下 哥しらず

わが庵ハ都のたつみ（宇治ハ京より辰巳の方なり）しかぞすむ（かくはすむ也）

世をうぢ山と（世の中をうきといひけり）人はいふなり

一首の心ハ我庵ハ都の辰巳の宇治山にてやすく隠遁してすめど世の中の何もうき事ハなきをうき世ぞしかと人ハいふ也といふ心なるべし　又我庵ハ都の辰巳の宇治山にありて何でそれを世の中を憂きものにおもひて隠遁したと人ハいふ也とよめるともいふべし　歌のつゞきかすかにしてたしかならず　此ハ其作者古今序に此人の哥を判して始終たしかならずといへるを思ふべし

小野小町　古今 春下 哥しらず

花の色ハ（花の色さきてうつろふ事也）うつりにけりな（花の色のうつるをよせて我身の老衰せしをなげきたるなり）

いたづらに（けふハ老衰の身となりてむなしく過ぬるといふ心也）

我身世にふる（世の中にふる也）ながめせしまに

一首の心ハ花ハさきてうつろふ事を見るにつけ我身も世にふりて老ぬる事をなげきて一首の心を思ひやりてうたふ也

うちに花のさかりて有を詠ながめてうつろひゆくを思ひやりたるなり　三四五二と世歌花ハ一首めにてよみたる也

述懐　古今春の部に入たるなり　花を詠く

一 ごくハ強説(シヒゴト)なり

蟬丸 後撰 雑一 相坂の関に庵室をつくりて住侍る
に行かふ人を見て
これや此 これが彼也 これとハ往来の人をさしていへる也 此とハ逢坂の関の事をいふ也 ゆくもかへるも
わかれては しるもしらぬも あふ坂の関
しるもしらぬも あふ坂の関 一首の心ハ都へのぼりくだる人のわかれ行も

一首の心ハ都

参議篁 古今 羇旅 わたの原 八十島かけて こぎ出ぬと 人にはつげよ あまのつり舟

僧正遍昭 古今 雑上 五節の舞姫を見てよめる

いひて四十の酒宴をする儀式ありき付て其此舞をしひて五節の舞をなど
よきいふ女を花中へ撰出して舞しめて女とも見ゆるを[illegible]
天武天皇吉野ゟおはしまし時唐ゟ落る天女くだりて舞ける[illegible]
ゆゑにそれよりあらはれのはじめくはしく新嘗を[illegible]

天津風 つは休字にて天の風なり 雲のかよひぢ 天の中の通路を云 ふきとぢよ をとめの姿 しばし

とゞめむ 一首の心は[illegible]風よ雲のかよひぢを吹とぢよ
天女とも[illegible]舞をとゞめ[illegible]
わうしう[illegible]ゑをしなりとゝめまほしと古今集の良岑宗
貞とわるかし[illegible]時の[illegible]

陽成院 清和天皇第一御子 つくばねの みねより落る みなの川 恋ぞつもりて 淵となりぬる 筑波山の峰の[illegible]

なれ共[illegible] 一首の心はつくばの山の峰より落るみなの川の
[illegible]つもりてみなれば[illegible]恋しいと思ふ
心は月日つもりて深くなりしと也

河原左大臣 古今恋四 融 嵯峨天皇子 陸奥のしのぶもぢずり 信夫郡 誰ゆゑに 乱れそめにし 我ならなくに 一首

[illegible]

のこりなの人の志を心をかしてとくるにわが君のをうとんとみれば
そめられたるやうにうつまでもうれなくてさしうつるとく古今集
ますらをのまことのこころ
人をおもひて死もむとなりおもんすてわがこころのあるあるべし
のふるさとなり

光孝天皇　古今仁和のみかどみかはのくに今尉
わかなつみてをりてをくるとなり
君がためはるの野にいでてわかなつむ春の野もしるく若菜にも花
に雪はふりつつ　一首のこころは君をおもひて若
菜をつむとなり

安く就任するとなり　さまざまの辛苦をしてようやくのぼりつめて
ほどなくなくなりぬ

中納言行平　古今離別　しらぬ人
立ちわかれいなばの山の峰におふ
まつとしきかばいまかへりこん　行平因幡の守なり
とし　松を待とかけり　峰におふ　峰に生ずるまつ
とかけり　いまかへりこん　今帰るべしとなり
立ちわかれて因幡へゆくとぞ都でまつとしきかばいまかへりこん　一首の
であるうと

在原業平朝臣　古今雑下　二條后のきさきの仏事
とは仏事とは天子の母君の仏事なり　中せ
ちこう　東の仏事
中せちこうの時　まことに后となりてせちこうはぬいつ
世上にて后の仏事なり
東国へくだりたるを歌とする

ちはやふる 抱朴 神代もきかす立田川からくれなゐに水
世すゑめづらしきことまゝ唐とてはからひからずる名所も神のあれとも今は
さひろく唐衣唐画などいふも世にめづらしき物をとりて十二といひし也
くゝるとは 紅布を一面くゝりよせて深き心をあらはし今しきりに深きを見にして水を
しぼりてよせる
ぞともいふべく
一首のこゝろは神代のむかしさまざまのふしぎありしかど
神代にもきかぬ立田川の水をあかくそめなしたる事を見よと及ばぬ
事なる紅葉のひとしく流るゝを顔々いひなしたる
藤原敏行朝臣 古今 恋二 寛平御時きさいの宮の歌合のうた
住のえのきしによる波 よるとはよる波と序をせり よるさへや さやをとめの句へかゝりしてよる
夢のかよひ路 女のかくれなる夢の中の道なり 人めよくらむ 一首
岸しよる浪のかよひさへやし
のこゝろはひるなどはまことに女のもとへかよふ事は人めをはゞかりてしのぶもの
なれどせめて夢の中にてはかよひてもいかゞとおもふに夢の中までも人め
をはゞかりてかよはざることよとよみたる也
中々浅ましき中なりとも人めしのびて逢がたき中なれば夢にてもあふべき人め
を憚るとぞおもひなげきたる也
伊勢 新古今 恋一
難波潟みじかき芦のふしのまも 此句序なりみじかき芦といはんとて難波潟を出し 難波渦のあしの短きをいはんとてなり
あはでこの世をすぐしてよとや 逢ずして世をすぐせとてか
いまさらに
あるとも
一首のこゝろはたとへいさゝかの間なりとも逢ずして世をすごせとなりゆくはあまりにつれなくおもはるゝといふ心なり
悔しさをかこちてよめり
元良親王 後撰 恋五 事いでて後に京極御息所につかはしける
わびぬれば 心をわびしと思ふ
らぬとこふ事ら
みをつくしても

わびぬれはゝ世の中にありわびたる也 しを歎きかなしびてよめり 今はたおなし 同しハ身をつくしても
今へうる生てゐるかひもなき死ぬるも同しく 難波なる 難波ハ津の国 澪標の序也 みをつくしても 澪標ハ船路のしるし
おもしろき事を尽して身をも尽す
まよはせ身をほろぼして也
又われぬれハなりてなげきかなしびて今ハ生てゐるかひもなく
死ぬるも同しやうなれバすでに世にすめバ人ハさだめて身をつくして
もあふべきとおもひのまゝにおもひ死ぬべきことをよくめでたく逢たき
て思ひ死にして死ぬる事を思ひて命をうしなふも同し 死ぬる命なれハ
身をなきものにしてもあはでやと思ふとよめるなり

素性法師 遍昭の子
今来むと 今ハ俗に近付といふなり いひしばかりに 長月の 九月也 有明の

月を 有明の月也 待いでつる哉 一首の心ハ今来んといひ来るといひしを
まびしくともまちけるにまてども来ずしてあかしつるといふ
いひておこせたりしかバまちわびて長月の有明の月に成ぬ
つひに来ぬ人をうらみてなげくなりと也

文屋康秀 古今 縫殿助 文屋の家の歌合の時

吹くからに 俗にふくとそのまゝと也 秋の草木のしをるれば 風にあふて
うへ 吹けば草木の次第にしをるゝさまをいへり しほれてく
むべ 俗にそうじやといふ也 山風を 嵐の字 山の風を嵐とハいふ
なるほど流の字の心 嵐といふらん 一首の心ハ山の風が吹とそのまゝ秋の草木が
しほるゝをこれハ成ほどげにも嵐といふはずの事也
世上でも嵐といふなるらんと也

大江千里（古今集作者）花月の夕べの家の歌合による

月みるとちくさにものをおもへども
一つにつれぬ人のこころは

一首の三月をそれ心うるものもてけるもしうとおもしい我身ひとりの
歌のわるいとは
隠岐の国にて詠む

菅家（古今集作者）朱雀院の（宇多天皇隠位を譲りて朱雀院と称し給へり）なりける時
なりける時（世平らかにわたりし）
海ならいはけなくぬれもぬさ旅人の途中の山にさかりぬるかな（きりぬさ道をちらして神をまつるなり）
わくらはに（たまたまに）問ふ人あらば（山の名のこもれるを恋の詞に）須磨の
浦に藻塩の（海藻）
海士のすむらん（海士の住んのまことまことまことまことの詞）
一首の三月をそれ心うるものもてけるもしうとおもしい我身ひとりの

院（朱雀院）はそれ位をゆづりてのち
ひとりの心のあはれがるかぎりなくて
わびとの詠の恋のすがたなり

三條右大臣（後撰忘三）女のもとにつかはしける

名にしおはばあふさかの関はこえなんとは思へど
をとこ業平朝臣の名を負ひて逢坂の関を越えんとすれども
いまはこの人一所に移るとしの名わりなり
人をこそ見めとてこしかど
うらの一首のこの人を恋ひ
ふるとしの中なりて行とぞして人をもあまりこそ来ぬるかな
ぶなわれがりとぞ

貫之（拾遺作者）亭子院（宇多天皇隠位をゆづりてのち亭子院と称し給へり）

み行幸 当代の天子みかどのありきを行幸といひ仙洞の御ありきを御幸といふ ありて御幸も
あるべき所なりと奏し給ふ 天子にも御幸ありてしかるべきとならんぜらるべき事となり おはせます
に院の御ともにまいりてよみ侍り 奏せむとて

をぐら山峰のもみぢ葉 もみぢ葉といふはもみぢをいひなりけると也 心あらば 情があらばとなり
などいふは信によみかけたるよりのことばの事之 今一たびのみゆきまたなむ 待合せてちらずまねようにし

一首の心は峯のもみぢよ汝も心あらば御幸もありなんとあるべき事也と今院の御幸も
あるべき事也と仰られし其の由を奏せむ
せめて御幸あらばちらずに待ち今一度のみゆきを
待合せてちらぬ様にせよと也

中納言兼輔 後撰 恋 女のもとへつかはし侍ける

みかの原わきて流るゝいづみ川 瓶原いづみ川は流の名 いつみきといふ字を いつみきとてか恋しかるらむ
いかにもしたきことはまだなり
とはまだしらぬ人を見てなどか心にもみておもふらむ
家はよそにみて一度も見ぬ世間の縁をもつて恋しき事也

源宗于朝臣 古今 冬 冬の歌とてよめる
山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草も
かれぬとおもへば 一首の心は山里は人かよはずしてさびしき草は

凡河内躬恒 古今 秋下 白菊の花をよめる
心あてにをらばやをらむ

初霜の置まどはせる（初霜が置て花と見まがはする也）白きくの花　一首の
心ハ初しもが置て白菊のうへハこなたかなたまがハしてど
れが菊とも見わかねバ推量にけれをりに咲てをらばやと也
折なりともをりもせらるまじきやうなりと也

壬生忠岑（ニブノ）　古今恋三　有明のつれなく見えし別れより暁ばかりうき物はなし
（信よ志んぼうづよいと不相　わかるゝときとつれなき態の子）
てもしんぼうづよく山へもいでて我わさ中々見えしける
月をのこしたる女のつれなきを見てかへりしはわかれ
（わかれき　かなしく）
一首の心ハ有明の月が夜があけてもまだ
我ハ恋しき事を見えしわかれ女が別れて其時恋しくしとなき也
それがそれより後ハ暁がうきものとなりしといへりと也

坂上是則　古今冬　大和国にまかれる時に雪の降けるを見てよめる
朝ぼらけ有明の月とみるまでに（有明の月のかげかとこゆる程ぞ見えたまで信ぜ了ぬなと）吉野の里にふれる白雪　一首の心ハ朝ぼらけのほのぐらきに
よしのゝ里のあたりにふりし雪の
よくれで有明の月のかげかとこえゆるて吉野の地によるがありしと也

春道列樹　古今秋下　志賀の山越にてよめる
山川に風のかけたるしがらみハながれもあへぬ（えながれぬ　せぬなり）
紅葉なりけり　一首の心ハ風が山川にしがらみをかけたと見えしを
いまだ紅葉が色ひさしく散てながれてもしえながれぬとせきひさ
との瀬にうつりてをるがすなはちしがらみぞと也

紀友則　古今春下　桜の花のちるをよめる

久方の光のどけき春の日にしづこころなく花の散るらむ　一首のこゝろ春の日はゆるやかにして花の散るを見るに心なくしづかなるものとおもふ

ちるまやんとて

菅原興風　古今雑上

千歳の松

千歳をへむとぞ思ふ君がまつ

も　古今の歌の前に

ちとせをへむとぞ思ふ君がまつ

なるべし

一首のこゝろ

千歳の松

千歳をへむとぞ思ふ君がまつ

千歳をへむとぞ思ふ君がまつ

年ふる人をたのもしとおもふ

紀貫之　古今春上

初瀬にまうでゝ

家にまかりてやどりをかりてやどりをかりてやどりを

[illegible]

の春とは言へど

清原深養父　古今夏

夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを　雲のいづくに月やどるらん　一首は夏の夜の明けぬるを雲のいづくに月やどるらんといひてなり

文屋朝康　後撰雜中

白露に風の吹しきてる山の　秋の夜の月かたぶくまで　一首は白露に風の吹しきてる山の秋の夜の月かたぶくまでといふなり

[illegible]

[illegible]

右近　拾遺恋二

わびぬれば今はたおなじ難波なる　みをつくしても逢はむとぞおもふ　一首は難波なる人の命のつくしもわるるなり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

浅茅生をのゝ志のの原しのとふ道をたゞ人とつゝみて
ゆきとゞくすべてもすべてもいふ詞つゝむことなくあるまゝにしるしかきとゝ
たぞ人は都をそふきなり

人のもとひしき

一首のこゝろをするとゝすべて人の目
ゝゝゝいなぎまつ人のうゝ人ぐ恋しいまゝとゝ

平兼盛

拾遺 恋一

天暦御時歌合

恋のまゝとはいとはしと色にいでぬ我恋は
物のおもふと人のとゝまでゝ

一首のこゝろ我恋しいのをつゝ
こゝろまゝにゝすれどゝ恋しきはわがゝ物思ひをもろゝと
人がとゝまるゝ報色へわいまゝとゝ三一はこゝと

元重恵見

拾遺 恋一

天暦御時歌合

恋すてゆ恋をするとりふゝ我名はまだしきゝ立ゝ人をすゝ
ゝゝおのゝ人ゝゝゝ

[illegible]

中納言敦忠　拾遺恋二

あひ見てのちの心にくらべばむかしは物を思はざりけり

[illegible]

中納言朝忠　拾遺恋二

あふことのたえてしなくばなかなかに人をも身をも恨みざらまし

[illegible]

一首のこゝろ　あふ縁

くさ〻まつるのでいとわるき人をうらみ数々の身を恨るり

するどうし〻〻一度もあれわかどをゆるのある中で

なにとなりひわるくそて人をもうるまぬ[illegible]

恋しさうるめさはわるまして俗ようて酒とる酒

[illegible]

源徳公　[illegible]

[illegible]

わるくもとも　あてもとも敷[illegible]

[illegible]

[illegible]

むすめとゆふことをうて
ゑいもんの記のまき

なりぬへきうた　一そくはあわちの女ゐ
つれなかりしのちのちのひて死てのちのこと
うる若死をしてとしつてゐる人のかりのうちに
つれなき女ゐのまねをしいまのむすめ死をしてとしつてゐる
らみをうるをこそうる

男根の恩　新古今　恋一

ゆふ月とゆるされぬとうるこゝろ　新しら史
とゝ水門のこと
うらをうく海をへまへ人の根をうらしてうくはるる
海をゆくへなるをのつぶりそいこゝろ八幡ちり　新人の死てをれ
道のそな　一首のさいこゝろ
ともあるうる人ゐつれなくせなくあるとき
恵慶法師　拾遺　雑

あまをうる人をうるとしを年ゆ

人くをうるゐ
八重葎　むぐらがくれ　志ひれる葛の葉ゐ　きゆ人をうる
えをうる人ゐ　ゆをへ下の根ゐのこと　雑ちの東宮ゐ　一首のこと
戦をとしなくしをうゐ　ゐをうるゐ根をあをうる者ゐ
をうて人のをうをうえねばあるゐ　ゐ　ゐ
源重之　初花　恋上　冷泉院東宮とゆふ河百そ年ゐに
風をしるこを　風がつよ　岩うゐ　二月廿日をへぐく
のこのこゐ　ゐをうゐ　ゐのま
うるゐ　一そくを人をうをうをうるゐをうをうをうるゐ
をうをうをうを

大中臣能宣朝臣　詞花 恋

源頼綱朝臣の家の歌合に　恋

思ひてぬる人を見えばやとよめる

ゆめにだに見えもしなばと思ひてぬるよりのちは目もあはぬかな

ひるねをしたりけるに　ひるねをしたりけるに　ゆめとそおもふ　一

首はをりてをんなのもとへ

あかつきのあかしのうらにあまをとめ　一

藤原義孝　後拾遺 恋二

女のもとへまかりけるを　をとこのもとへまかりけるを

あるじ思ひつれなくもてなしけるを　あるじ思ひつれなくもてなしけるを

いきづいてなげきけるを　いきづいてなげきけるを

今はいかにとなげきけるを　今はいかにとなげきけるを

なげくらんこよひのほどの　なげくらんこよひのほどの

ねざめをぞ思ひ知りぬる　ねざめをぞ思ひ知りぬる

一首は恋ひつつ

思ひかねてをんなのもとへまかりけるを

あはじとはいかにかはせんとなげくらんこよひのほどの

ねざめをぞ思ひ知りぬる　一

さてとかの詞の歌とかの詞の歌とをかきあつめてかくなん

藤原實方朝臣　後拾遺 恋一

女のもとへまかりけるを

うくとしらばなげきもせずとはばかりつつ

そひはてぬるのちはいかにとなげくらんこよひのほどの

ねざめをぞ思ひ知りぬる　えやはいとはぬ　ぞのまうく

のさてはいかにとなげくらんこよひのほどの

ねざめをぞ思ひ知りぬる　えやはいとはぬ　ぞのまうく

詞のし

[illegible]

[illegible]

後鳥羽院信濃

（拾遺 恋二）

女のもとに宿侍りける日、

君がゆく道の長手を思ふにぞ
今宵の月の待ちぬべきかな

（君がゆく日女のもとへまゐりける道を女のもとへとゝらるゝ）

右大将道綱母

（拾遺 恋二）

入道摂政まゐりわたりける夜、

門たたせじと思ひてこゝろみしに
あけてをとつれぬ物とこそ聞

（俗ニヤツガリトイフ）

一首の意は、われをやとてこれる事
をとこよくこそ思ひてなれ、いかゝ
とゝれば、しばらくのうちの物ゝ
うらみしきと

右大将道綱母

（拾遺 恋二）

門たたせじと思ひてこゝろみしに
あけてをとつれぬ物とこそ聞

（俗ニヤツガリトイフ）

てまゐりたりけるを、あけさせて、
（こゝろをわたりぬるきこゝろ）
（こゝろをそへていひのゝしる）
なのりをつるなりけりとおもひ
なりぬるあのわつるゆるのあるを
（なのりをつるなりけりとおもひ）
（パのなまりなるべしとこう）
ちるをいかゞ伝ふるとゝらるる
（パのなまりなるべしとこう）
ひたきものとらるるひらり

一首の意は、門のあるをもとづゝ
かちてこゝろみしをあけさせず
のあるまゝにしたがひてあけさせず
（のあるまゝにしたがひてあけさせず）
（くしいわとかりのあけんと）
独言の意

備前二位母

（新古今 恋二）

中関白のもとにまかりける頃

ひとをこそ待ちもしけれ
（ひとをこそ待ちもしけれ）
（ものをこそ思ひもしけれ）
（ものをこそ思ひもしけれ）
今はまたこゝろを限の命とぞ
思ふ

一首は、今はまたこゝろを限の命
とぞ思ふなり、その世ゝをもとり

このたびはつひはてんとしたりつるまでわらうこと今日を命の限りとて

けふで死るとやらもがるあれし一生をまさらぬすぐしかたうとて

大納言公任　千載雜上　滝殿の大夢者いかうりうして人く

滝のおとに名をえてくしくなりぬれとなをくたちて大笑ちの滝殿をとひて

世をこそ言ひし名をとめ　なりて流布して滝の殿の滝　桂　今も名高きまさきの　きこえけれ　せとてしかする

さこゆる風の　一首のこと大笑ちの滝殿のおりし迎まてこれ滝ち

今でこそ語りて久しくなりぬとせとち名をうしの滝のまゆをを

名をのこりけるとそ　名をのこりけるとそ　拾遺集よりもりて初句の名をかり

和泉式部　拾遺送　心地をいなり法師なりて人

はりもてつかはしける

わすらんけ世をそむくみなんけ世をそむくるそなりとらるるそなりなり　世をのの世のの世をとらるる　世をのこのこ

なりのひかるなりのひかるなりのひかるな

めくりの月の影あひてみーやそとこと（月のかげのうつること）うねまふ雲のたれすー（空をたれすーなる雲をいふ）（雲月の山にかかるをいふ）

一首のこと（雑なり）みてあるく人（道中をあるく人）その人でらないとまぢはきくとうれうちに月のかげ山（くもる月）

かたれてなりてゆるまつ（花の人をもとめしと）

大貳宗信（長禄二）うまくなること（こゝら連歌なること）おいつ下なくこゝら連歌なること）

有るこのなれ（花）風かすて（無ふかすてよりくと）（まぎれるあるでとうの詞と）

てそとして（あく伝ささわ）（とりふの詞の縁）そよまもまと人をとるれやわ

する（ほれやもるとれば）（一首のこと）（ちのをとりしこと）

一首のこと（ちぐつ）（つるすくとひし詞をう）

（くそさつそれ）（連歌）（あれ）（ぐさ）（なるより）（人をとれ）（まもり）

（ほれ）（本）（なり）（なるうち）（連歌）（こと）（なること）

赤染門（長禄元二）中宰相（白女將の作なる詞）（すうう）

なる人（同し様に兄弟）おしひ（ひ）（作なりものいとえんうちなる）

（そ）（こと）（いきりしう）（こと）たのめて（たのめてこと）（あの作る詞）（作）（をして）（おう）

てこさりなるけとりて（女のこと）（なること）女ようりて

中宰相（こと）（こそ）（ぐ）（又）（こと）（そ）（ぐ）（ぐ）（ぐ）孫なりもし（毎）（ものこと）

けちまなてるぬくまて月をうし（ぐ）（ぐ）一首のこと

ぐつと又食てそうぐるもう（ぐ）病でありてわとこひ来うとのか

ひしはりみそをたのそ（ぐ）（ぐ）月のうぐかてそうてそうと

小式部内侍　金葉雜上　和泉式部

小式部が母なり　保昌の妻なり

して　詠まれし　丹後へ行る道のほどなくて　小式部内侍　病みやもに　斎宮の

母なる和泉式部　伊勢へ　下向　中納言定頼　きて　斎宮　せさせ給ふ

人づてにしらんや　和泉式部　とひてわざとなるべし　つひにまうでて　丹後へ

中なるとうとうとなるべし　丹後へ　つひにまうでて　丹後へ　使りまうでつり

まうでいつる　心ばせ　なり　詠　をこりかうぶらむをまち

て　立ちをこりとめて　とめてよめる

大江匡房朝臣　旨丹後守なる名なり　丹後へ　遣はしける

みちの国　陸奥　ゆき　天の橋立

丹後の名所　見たいもの　一首の意　ふるさとの　ふるさとの　丹後　ふみ　見たい

伊勢大輔　泉式部　一条院崩御　天の橋立

ふるさとの　ふるさとの　ふるさとの　ふるさとの　ふるさとの　ふるさとの

斎宮　斎宮　斎宮　斎宮　斎宮　斎宮

いにしへ　いにしへ　いにしへ　いにしへ　いにしへ　いにしへ

九重　九重　九重　九重　九重　九重

八重　八重　八重　八重　八重　八重

ゆかし　ゆかし　ゆかし　ゆかし　ゆかし　ゆかし

一首の意　一首の意　一首の意　一首の意　一首の意　一首の意

清少納言

なを拾遺 雜二

大納言行成朝臣

内の御わたまいりたりけるに

清少納言

清少納言のりと

其てあはせ

二三日つゝくまゐりはべりしに

[illegible]

清少納言

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

諸ともにわすれて山ちる花より
風の心ある人もなし　一首のこころ
我おもふに海も我とあるべし山ちる
よるべなれば思て行一ツ見れば
ちる海とうかるまと

周防門伝　千載　雅一

そなへくわるゝ
周防門伝うりわすれて令樣のなるとしてうりのるなる
なと志のひやうしをきて　枕もの
ひちなをつまてくる事
大納言為房卿
枕草
春の夜の枕草紙　綾き　美はうりかなる　まくらの
射とう　うりむ名ゝ伝をとれ　一そへ
ふかれてうりかなる　枕草紙はりてまことにわすれ
なくなりたること　名をとる事

二條院　俗名　雅定

ちむとたかしめ　例なるひとおりまして　位なを
まなり
月のあるを西流して
心ゝまわて　海世なる　（て　ちかくなりて　なかるゝ　ゆくなり）
なるを　意しるべき　夜半の月うかと　一首のこ
ちかんなる　なるをしるべき　なんでは世をうくはなるもまいれば　き郭

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のあら波へんのうらうまきまとまをとをとうらうぶや　ゆうとのうらうぶと信をうらぶむうぶまうとうまき
神のゆきとしてふるとの　神のゆきとしてふるとの　ふるとの神のゆきとしてふるとの神の神　一首の
こゝろ世こでん濃いわぶ　くしいと濃もる人の孤独をいろと注て
はりとてわらうも志ゆきと

橋中納言通方（ヲ）　俗称道長　うぶのかいまうちもれ彩る
て人〳〵酒をうへて所よき仏ゆ遠き山のはて
をゆむとうふとうをとうる

言仏の尾上　山のはてぶきとし彩る山のはて　はてて咲ときり仏
山のはてさてのはしもとりいとうみすきをはもわるなむ　一首のき
山のはてきまわる紙きをさに
山のはてきゆはてうはてはてうぶ後おうがそのこをうるひきゆ

ようすみがうをて濃うれてん濃ときびるわれりとくか山をきえ
てゆる流れて紙の遠としりがうるうを

源俊頼朝臣　所よき仏ゆる時いのきとゆ通遠　（千載　恋二）

橋中納言俊忠家の遠十首の

うゆうはる人を　うくゆうはる人をとをうてんはくしけ白い
つゆうれて初瀬の山おろしよ　山おろしよ山のうはる流れ　は
ゆうれてほゆ山おろの初瀬のことゆ　いたくぬれを　一首のこゝろうんせ
ぬれやけゆうつれ　ぬれいをいのくはゆ　くれとしのうちせぎ
ゆうのとゆゆうまうせゆんまたくうれてきゆ

後京極殿　千載雜上

[illegible]

法性寺入道前太政大臣　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一首のこころは[illegible]

雅経卿[illegible]

源兼昌　金葉　冬

わたの原こぎ出でぬと人にはつげよ海人の釣舟

[illegible]

一首のこころは[illegible]

[illegible]

九条大夫頼輔　[illegible]

[illegible]

[illegible]

侍賢門院堀川　百首より

[illegible]

なるらむ　髪の縁の付

髪のみだれて　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後徳大寺左大臣　千載　菱

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

一首のこころは[illegible]

[illegible]

[illegible]

道因法師　千載恋三

なにはがたみじかきあしのふしのあいだもあはでこのよを過すべしやは

命あるものにあらざりけり　一首のこころ

なにはがたみじかきあしのふしのあいだもあはでこのよを過すべしやは

命とは思はぬ人のつらさにぞ

ながらへてもなほ命とは思はぬ人のつらさにぞ

命あるものにあらざりけり

皇太后宮大夫俊成　千載雜中

述懐百首の中より

除目に漏れて

世の中よ　よのなかのつらさ　いふかひなし　山の端の月

みちくるしきものなりけり

なにしおはば　思遣せてやとなりけり

山の端の月

一首のこころ

世の中よ

みちくるしきものなりけり

なにしおはば

山の端の月

なるなるなる　一首のこころ

世の中よ

みちくるしきものなりけり

なにしおはば

山の端の月

なるなるなる

なるなる世をのがれて山の奥にこもらんと一途にみなす（心を山の奥にとどめなしてはひしらんと）

一二の句のつづきは述懐あり

まりよ世をとりもてるやあむ耳こそきこゆ

後鳥羽院御歌　新古今雜下

なるなるなる又世をうやまのくまもうしとこそ一世をこそ思へ

一そもそも世をうしとたのむ人もなるなるなる

又思ふとおもふもあるうも世をうきものと思へ

世を今でき思ふ人ぞ年ふるまでもきるなりけり

俊恵法師　千載恋二

数ふ次のうち　数ふ次のうち　数ふ次のうち　数ふ次のうち　数ふ次のうち　数ふ次のうち　数ふ次のうち　数ふ次のうち

世の奇としてある

数ふ次のうち　数ふ次のうち　数ふ次のうち　数ふ次のうち　数ふ次のうち　数ふ次のうち　数ふ次のうち　数ふ次のうち

戸のすき間なり　片へ　人のこれなきつまとなるわびしさ　一首のこころは

人がつれなきさに花をすかしわびしとなり　わが世で人がつれなきのこころ

なれば花のすき間なるべしとよめり

西行法師　千載　恋五　月おもしろしとて恋をする

なるべしとて月やいかがをなりとする　月がおもしろくすると　パのこと

なりとて　やのなどとする　の下へ

なりとて　う出れば　なる月をみるようにて　恋をすると　我な

らぬ　一首のこころは　月をなつかしくとよびて月をあはれとせるは

うらやましきなり　人をなつかしくとよびて　月をなつかしくとよびて

恋をするとこころをかけたるなり

寂蓮法師　新古今　雑下　千年を行くとてかつがれる時

村雨の露もまだひぬ花の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮

一首のこころは　村雨の露　霧立ちのぼる　秋の夕暮

皇太后宮大夫俊成　千載　雑二　杉の戸の家の前の行合の

橋　なるべしとよめるなり

雑波　川　一首のこころは　岩ばしり　川波　みなぎりて　やの

波　なるべしとよめるなり　川の波　みなぎりて　やの

波　なるべしとよめるなり　川の波　みなぎりて　やの

波　なるべしとよめるなり　川の

むの緒よ　むとつゝぬきゝる　[illegible]

せゝらぎとみをむの緒のゆるとも　[illegible]

[illegible]

きのふるまゝのいけのみぎりふきく

一首のこゝろ我命よ今はひとすてゝ

ゆるすゝぐいつそ死もせよゝ　[illegible]

[illegible]

殿富門院大輔　千載　恋二

みせけやなとゝ[illegible]

[illegible]

一首のこゝろ　[illegible]

[illegible]

こゝろ[illegible]

人〻見せけやとゝ

後京極摂政太政大臣　新古今　百首歌たてまつりし時

きゝわけぬ　やの字ゝくをひとりはやのなりて　[illegible]

ちもゝ　ざいさ[illegible]

[illegible]

首のこゝろ　[illegible]

のうちもふる[illegible]

[illegible]

二條院讃岐　千載　恋二

[illegible]

我神の海千ちよ人沖の石の　一首の

人もしらぬ我神海千ちよ人沖の石のこけてしのびてしらぬ

[illegible]

前大僧正慈圓

千載 雜中

わたのはら　大海原をこぎいでてみれば久かたの雲ゐにまがふ沖つしら波

[illegible]

[illegible]

[illegible]

それとあるべしとて返しとゝろなるものハ歌をかそへ

撰中納言定家

新勅撰 高上

建保六年内裏歌合に

あま人をかゝる浦の夕なぎに

海人をかゝる浦のこゝろを海の面平になりて大なる波おだやかなるものゝこれを海汐ハ夕なぎとゝいひ夕汐ハ夕なぎとゝふ

やゝ

やの字をかゝるやゝ

もしほ

時ちかくなりぬとゝいふ字をかくてをはくし

身もとゝろけて

一首のさこゝろ人をまつるゝ時ハ松帆のうらに夕なぎにやくもしほのごとく我身もこがれてゝ思ひ焦

従二位家隆

新勅撰 夏

寛元元年女院入内の御屏風に

風そよゝと

そよゝと音のするを猫の音ふるを風のふくと思ひなしたるなり

なびけ小川の

猫の音の生てあるを池のなびけてゝ生せこゝろ添ゝとゝいとさるゝ心ゝなり

みなそきさそ

川色見えたるゝ

夏ハ

一首のさこゝろ風のそよゝと吹ゝ風ごとに小川のなびけてゝ生せこゝろ添ゝとゝいとさるゝ心ゝなり

の小川の夕なぎにこゝろの波ハ立ぬ

波とせあをなるゝみそぎをするわゝ

又夜物こゝろ風ハ

橋の水ハ

まちびの清き川きよくの五月合しつゝ

ぎもはゝ

をぐらゝ

河つぎ後夏ハ

あやまちにけるゝ

一首のさこゝろ風ごとに小川のなびけてゝ生せこゝろ添ゝとゝいとさるゝ心ゝなり

橋の水ハ

橋の

の五月

の字

の

の

の

えらりあはせ

後鳥羽院　源頼政　雑中

人もをしあしたのはらの草の露
わがこゝろからとはしらずや

（人もをしあしたのはらの草の露　死ぬる人の中を惜しみ悲しむ人もあるべし　わがこゝろからとはしらずや　偏にもとこれ人の心の迷ひなれば　世をわがこゝろからとはしらずや　天下の事は心ゆるすまじき世の中とわがきなくもあるべし　人と生まれ二つの身なりとは　天下の人の身なりとは　人命の有限なるべし）

一首のこゝろ

天下の政はんこうなりし世の中わがこゝろからとはしらずや
と世を心とゞめてわがとはしらずや　紀の素（ナニガシ）くう美わさ
でわうなとをしく思ひ入れ人とわり行くべし　世をなげき
さんとまゝ（きとうらわしく思ひ入れ　人とわるとこゝ　御ゝ命本

思ひ　たゝ　こゝ　わ　の　世　弁　思

順徳院　源頼政　雑下

百敷や内裏の古き軒端の帝位のおとろへる老のふみ

（百敷や内裏の古き軒端　帝位のおとろへる老のふみ　世のふるさとなりぬれば　古き軒端のふるさとなりぬれば　いとゞ生るものゝ　とれをしのぶとなりぬ　牡あまりあるむらしゝ）

一首の心　内裏の軒端の古きをみるにつけ　世の帝位のおとろへる世の
八雲ふるとなりぬ　あまりあるむらしゝ　やはり古ふるさい者の帝位ぞとゝ
もゝ心位をすくませ　世の欲なり

百人一首抄

[illegible]

[illegible]

[illegible]

常相見ぬ所ゆゑ改めて此かしこやいろく今の
世とゝなりしたのしさ世さわひてゝ此所
ゆゑ永とゝなりて初のゝ志ゝ所たのもしなるそ中
ゆ初相まゝひれ世えみゝらく力らまて世文明の化ゝ
とするゝん〳〵ゝ此ゝ

享和辛酉甲子四月　　石原義忠四明